平成二十九年度　入学試験問題

国語（理系）

一〇〇点満点

≪配点は、一般入試学生募集要項に記載のとおり。≫

（注　意）

一、問題冊子および解答冊子は係員の指示があるまで開かないこと。

二、問題冊子は表紙のほかに10ページ、解答冊子は表紙のほかに16ページある（うち11ページは下書き用）。

三、問題は全部で3題ある（1ページから10ページ）。

四、試験開始後、解答冊子の表紙所定欄に学部名・受験番号・氏名をはっきり記入すること。表紙には、これら以外のことを書いてはならない。

五、解答はすべて解答冊子の指定された箇所に記入すること。

六、解答に関係のないことを書いた答案は無効にすることがある。

七、解答冊子は、どのページも切り離してはならない。

八、問題冊子は持ち帰ってもよいが、解答冊子は持ち帰ってはならない。

一　次の文を読んで、後の問に答えよ。（四〇点）

今日思いがけなく、古い友だちから葉書を受け取った。山の奥の村に移り住んでもう三年になり、再び都会の生活に戻ることもあるまいから住所を知らせておくという、それだけが書いてある葉書だった。その数行の文句を、一字一字見ているうちに、何という贅沢な奴なのだろうと思った。(1)まさか何というずるい奴だとまでは思うわけには行かなかった。

上州の、そこへ行く途中の街道を辿って行けば、末は道が山へ消えるようにせばまりながら越後へ入ってしまうそのあたりを、私も詳しくはないが知っていた。そして彼の住んでいるという村も、彼とは全く無関係に、もうずいぶん前に訪れたことがある。

私のその友人と、その村とがどういう関係にあるのかは葉書にもひと言も書いてはないし、これまでにそんな話を聞いたこともついぞない。何しろ二十年は会っていないし、その一枚の葉書をいくら睨んでいたところでそこに書いてある極く簡単な文句からは何も考えられない。だから彼にしてみれば山村に移り住んでもう都会には出ないだろうということが、私がついそう思ってしまったように決して贅沢なことなどではないのかも知れない。ただこの葉書は、もう忘れかけていたその山村の秋を私の記憶の中からいやに鮮やかに想い出させる役目はしたことになる。

＊

そういえばあの時、私は何でも栃木県の山ぞいの、丘をほんの一日二日歩くつもりで出かけたのだった。稲刈ももう殆んど終わって、束ねた稲が干してあるころだった。景色を眺めるというより秋の空気の匂いを嗅いで歩くのが嬉しかった。二日歩いて夕暮れ時に、そろそろ帰ることも考えなければと思いながら、空の色とそこを並んでゆっくりと通る雲があまり穏やかで、そのまま上州の山麓へと足を向けたのだった。

古いことで泊った場所や宿のことなどは何も想い出せない。まるで放心の状態で歩いていたとしか思えないように、その辺のところは記憶にない。

秋が安らかに草に住む虫たちを鳴かせ、羊のような雲を空に遊ばせておく限り私は(2)こういう旅を続けていたい気持にさせられてしまった。だからこの村に私がやって来て、水車の音をきいたり、農家の納屋に出入りしている鶏たちを見たのは旅に出て幾日目だったのかさっぱり想い出せない。

＊

こうした山麓の旅のあいだには幾つもの集落を通って来た筈なのに、どうしてこの村だけが、たった一枚の、その村の容子などは何一つ書いてない葉書によってこんな工合に鮮やかに甦るものなのか。

私は、牛を牽いてちょうど自分の家に戻って来た農夫に、多分この村の奥の道がどうなっているかを訊ねながらほかの話もしているうちに、その家に熟したままかなり残っている柿が急に食べたくなって、三つ四つ売ってもらえないものかと頼んだ。

農夫は、竿をにぎって柿を少し乱暴にはたき落した。私は黙って見ていることも出来ずに、柿の木の下に走りよって、落ちて来る柿をうけ止めて、もうこれだけで充分だと言った。

柿は枝についている時には、どこにも傷一つなく、一つ一つが大きな酸漿のように見えていたが、受け取ってみると、あっちこっちに黒いしみだの傷もあった。ところがそれを持って行って食べなさいと言われた時は、(3)なんにも邪気のない、正直で素朴な農夫の心を手のひらに渡されたような気持だった。

＊

点々とある農家のあいだの、まっすぐにはなっていない道の両側には、幅は一尺ほどではあるが流れがあり、豊かな水が方々で音を立てていた。道も坂だったのだろうが、流れにも勢いがあり、ところどころに野菜や農夫たちの道具を洗うための場所が出来ていて、そういうところでは水は小さい渦をまいていた。

その頃私は、物そのものよりも、色や光の組み合わせによって風景を見て、またそういう印象を強く残そうとしていたためなのか、西に廻った太陽からのやわらかな橙色の陽光による、あたり一面の、かすかにほてるような、あるいは恥しさのた

めの赤らみのような、その色合が私に何か物語をきかせているようだった。

それは改めて私から人に語れるような筋を持ったものではなく、私をその場所で深く包み込んで行くような物語だった。

＊

上へ登って行けば僅かばかり畑があって山道になると言われたその道を、もちろんいい加減のところで引き返すつもりで登って行くと、誰がそこに据えたものとも思えない、また自然に大昔からそこにあったとも思えない岩を見つけ、それに腰をかけて私は貰った柿を食べた。

そうしてこの高みから村を見渡して、もしも私がここへ移り住もうという気持を起こしたとしたら、どこへどんな小屋を建てて生活することが許されるのだろうかと考えてみた。

この村はどこに特徴があるというのでもないし、東側から左手で抱き込むように出ている尾根にしても、ところどころに私が腰を下ろしているのと同じような岩が露出しているだけで平凡なものである。だが太陽は秋になると暫くのあいだ、この村が好きで好きでたまらなくなると言った、優しさがこぼれたような光をそそいでいる。

(4) ここは恐らく太陽にとっては秘密の土地であるに違いない。そこに昔ながら住んで土を耕している者たちは、そんなことに気もつかずにいるかも知れない。それを、たまたまここを通り過ぎて行く私が、僅かの憩いの時間だけ、優しく高貴な光を浴びるのを許してもらえたのだろう。

＊

だが、それに有頂天になって、私自身がこの秋の太陽に愛されている土地に移住を企てることは、ここがそうしためぐみを受けているところだけに、その値打を然程に知らずに頸に飾っている宝石をちょっとした簡単な言葉でどこかの島の住人から奪いとるのと似ているような気がした。

この村は秋の、そこに秘かに憩う太陽の愛撫をうけて、貧しさの故に落ちた壁も、古さの故に倒れかけた納屋も、労働のために褐色にやけた人々の顔も、過不足のない調和の中で静かな息づかいをしていて、私が住む場所は勿論のこと、休息の場所

さえ見当りにくいところだった。

葉書をくれた友人はこういう村に今住んでいる。

（一九六二年九月）

（串田孫一「山村の秋」より）

問一　傍線部(1)はどういうことか、説明せよ。

問二　傍線部(2)はどのような「旅」か、説明せよ。

問三　傍線部(3)のように筆者が感じたのはなぜか、説明せよ。

問四　傍線部(4)のように筆者が思ったのはなぜか、説明せよ。

二

次の文を読んで、後の問に答えよ。（三〇点）

今日ごくあたり前に使われている「言文一致体」は、明治二〇年頃から明治四〇年近くまで、およそ二〇年かけてようやく一般化していった。たとえば『吾輩は猫である』（明治三八～三九年）なども、この文体が一気に広まっていく渦中に世に問われた小説だったのである。猫に「～である」という演説調で語らせるなど、それまで思いもよらなかった実験が可能になったわけで、小説の表現領域や発想はこれを機に急速に広がっていくことになる。漱石が齢（よわい）四十近くなって初めて小説の筆を執ったのも、また森鷗外が長い中断を経て現代小説の執筆を開始するのも、この新しい文体に触発された側面が大きい。文体をめぐるそれまでの伝統を見切ったことを代償に、近代小説は一気にその全盛時代を迎えることになったわけである。

言文一致の利点は、なんと言ってもその平明な「わかりやすさ」にあったのだが、これと並び、当時しばしばその長所とされたのが、記述の「正確さ」であった。物事を正確に写し取っていく写実主義の浸透にともない、「言文一致体」は日常のできごとを〝ありのまま〟に描写していくのにもっともふさわしい手立てであると考えられたのである。

だが、考えてみると、(1)これはそもそもおかしなことなのではないだろうか。

口語（会話）は、本来きわめて主観的なものであるはずだ。表情やみぶりで内容を補うこともできるし、あらかじめ共有されている話題であれば、自由に内容を省略することもできる。当時の描写論議、あるいは言文一致論議を見ていて奇妙に思われるのは、主観的な口語を模したこの文体がもっとも「客観的」で「細密」である、とまじめに信じられていた形跡のあることだ。急速に広まっていく写実主義の風潮の中で、過度に客観性が期待されてしまった点にこそ、おそらくはこの文体のもっとも大きな不幸と矛盾、同時にまた、それゆえの面白さがあったのではないだろうか。

田山花袋の「平面描写」論（『『生』に於ける試み』明治四一年）は、「客観の事象に対しても少しもその内部に立ち入らず、又人物の内部精神にも立ち入らず、ただ見たまま聴いたまま触れたままの現象をさながらに描く」ことをめざしたもので、言文一

致体にいかに客観的なよそおいを凝らしていくか、という課題から生み出された、当時を代表する描写論である。言い換えるなら、「客観」への信仰があったからこそこうしたよそおいもまた可能になったわけで、ここから話者である「私」を隠していくためのさまざまな技術が発達していくことにもなったのだった。結果的に叙述に空白――目隠し――が生み出され、読者の想像の自由が膨らんでいくことになったのは(2)大変興味深いパラドックスであったと言わなければならない。

一方で、こうした「話者の顔の見えない話し言葉」の持つ〝欺瞞〟に対する疑問も、同時にわき起こってくることになる。特に次にあげる岩野泡鳴の「一元描写論」は、花袋の「平面描写論」とは正反対の立場に立つ考え方なのだった。

> 作者が自分の独存として自分の実人生に臨む如く、創作に於いては作者の主観を移入した人物を若しくは主観に直接共通の人物一人に定めなければならぬ。これをしないではどんな作者もその描写を概念と説明とから免れしめることができぬのだ。その一人(甲なら甲)の気ぶんになつてその甲が見た通りの人生を描写しなければならぬ。斯うなれば、作者は初めてその取り扱ふ人物の感覚的姿態で停止せずに、その心理にまでも而も具体的に立ち入れるのである。そして若し作者が乙なり丙なりになりたかつたら、さう定めてもいいが、定めた以上は、その筆の間にたとへ時々でも自分の概念的都合上乙若しくは丙以外のものになつて見てはならぬ。
>
> (『現代将来の小説的発想を一新すべき僕の描写論』大正七年)

「話者の顔の見えない話し言葉」に対して、はっきりと一人の人物の視点に立ち、その判断で統一を図れ、という主張である。(3)この主張をさらにおしつめれば、明確に「顔」の見える「私」を表に出すのが一番明快である、という考えに行き着くことになるだろう。それを極端な形で実践したのが明治の末から大正初頭にかけ、反自然主義として鮮烈なデビューをかざった白樺派の若者たちなのだった。彼らは一人称の「自分」を大胆に打ち出し、作中世界のすべてをその「自分」の判断として統括しようと企てることになる。

(安藤宏『「私」をつくる　近代小説の試み』より)

問一　傍線部(1)について、筆者がこのように考えるのはなぜか、説明せよ。

問二　傍線部(2)について、このように言えるのはなぜか、説明せよ。

問三　傍線部(3)について、このように言えるのはなぜか、説明せよ。

白

紙

三　次の文は、幕末の歌人中島広足が、親しい知人たちに次々と先立たれたことを述べた文章の末尾の部分である。これを読んで、後の問に答えよ。（三〇点）

敦化（あつのり）は、おのれに二つばかりおとれる齢（よはひ）なりき。四とせばかりさきより、病ひの床に臥（ふ）ししかど、(1)をりをりはおこたりざまにもありしかば、さりともつひにはさはやぎはてむとのみ思ひわたりき。この睦月のはじめつかたは、ことに心地もさはやかにおぼえしにや、

この春は霞とともに立ちいでて野にも山にも杖をひかまし　…A

とよみておこせたるに、やがてこれより、

いつよりもうれしかりけり野に山にともにあそばむ春ぞと思へば

と言ひおくりしも昨日の事ぞかし。弥生のはじめより、にはかにあつしくなりて、十二日になむ、ながき別れの人とはなりぬる。

思ひきや春の霞の立ち別れ死出の山路に杖ひかむとは　…B

とぞうちなげかれし。(2)なほ人々の別れにも、あと弔（と）ふをりをりにも、よみ出づるおのれが歌はあまたあれど、何かさのみはとて。

（中島広足『海人のくぐつ』より）

問一　傍線部(1)を現代語訳せよ。

問二　傍線部(2)はどのようなことを言っているか、説明せよ。

問三　Bの和歌はどのようなことを言っているか、Aの敦化の和歌を踏まえて説明せよ。

問題は、このページで終わりである。